

し連ね其中よお半を春中よ長右衛門。衣裳髪ハ左斗り魂さことあらねども。嫌氣澤山。
 下座よハ鳴物打をらし。三味線二挺不清元の 鹹聲も何とやら。今迄香し。ホロ酔も。興
 さへさめて。臨くをりから。何時の程もや。見物の中より工み拵へけん。松より松よ仕掛
 けたる兩車もて。バラくいと降川させたる血の雨の。先よ立たるお半長右衛門二人の衣
 裳髪まで真赤よあたる其臭氣。住蘇魚のわたの腐りたる。夫か有らぬか。知らねども。
 鼻を貫きたえ兼れば。皆さく鼻を掴け騒動。其うち那の雨よて燈火片端より消え。雲
 間の月も薄雲よ半隠れて程能き頃おひ。木陰を「ミシ」ノックノックと歩み出来る真の
 狸大罌丸を引摺ながら。ノックノックと近寄れば。今血の雨よて魂をひしがれ。十方ハ
 暮れ。ハ笑人。ソリヤ社眞の狸が出て我輩を取喰ふぞや。遊よ。ノックノックといふ程こそあ
 り。四方八方へ散々に逃乱れ。乗り来りたる船を探ども何所へ行たるや。更よわからず。
 陸方聲きて。芦の中等よ這屈み影を隠して。猶豫う中見物の船ハ鼻をささ。遙よ隔ち
 しことなれば。一伍一伍の解らぬ故。叫さ。ノックノックと乗り出せり。其中只一艘の汁こぼしハ一

般の手馬と共に未だ。もやひを解かざりしが。此時堤の方より(福田村洲崎村)と印を
 打つた提灯許多點し来る若い衆大數押来り其所よ此所よハ笑人をあさぐり求め。像
 て準備の細引よて一人ハ旋巻庄屋の許へ連れ行かん。ひまめき騒ぐ折からよ汁
 こぼしの船の中より暫くノックと聲も。やさしさ鷺の初音よ齋一き婦人の様子。抑も
 今此所よ立出るハ何なる主よて有るや次の巻をみて知るべし

花暦八笑人五編中之巻終

花曆入笑人五編下之卷

江戸 與 鳳 亭 枝 成 戲 作

船の中より聲をかけて出来るの奈何ある者とみれば四十三四の奥女中大川端造とも云ふべきお局役髪ハ片外一にて御遊山船のしどげ無き衣裳よの編敷寄屋の帷子よ鼠編珍に金糸を以て立木匠を縫ひせたる帯箱狹子の間より銀鎖の飾りたる。未だ枯さらぬ老木の花。見所のある姿にて。今一人の三十位。云ハねと知るさ。中老役。紅入の大縞越後を着て。金銀入りの輪奈天の帯を締め。これも箱狹子を胸の前より突出し其外御末。御仲居。御へした数人。下部男二人に提灯を持たせ。奥家老の胡麻搦天窓で上布の帷子黒緞の羽織を着し。鮫鞘の細い大小を帯び。あうくと上陸す局。今日姫君様淺草寺 御参詣の御歸掛け是なる水神の森よて虫聞きの御遊。然るに大勢人数を集め深更よ及ぶまで。狸の囃子とをそらへ。鳴物をあら。物騒かしく致したる段不届至極。此所を何處と心得るや當所ハ我君島山家の乗船場。殊ふ御先祖空阿彌様の御墓の前。言語不堪えさる

うつけ者共。情亦此者共。繩を掛けたるハ當所の若者共あるべし。庄屋方へ引行くハ然る事ながら。折能く。我々居合せたれば。其儘細付よて請取り。館へ引行くべし。皆の者左様心得て宜からう所の 若者「ハ、畏りまして御座ります。左次「何方様か存じませんが。私共の不調法所 扱も辨へませず。茶番を致しましたる段。恐入まして御座ります。何卒お慈悲に御救し被成て被下まし。皆なもお詫を申上るナ 阿婆「へいへい。眞も恐入まして御座ります。何分御免し被成て下さいまし。一体小子ハ茶番等が大嫌ひで御座ります。皆を寄てたかつて勤めました故無 披至しまして御座ります。譯。何分御免遊して被下まし。香七「ハ、彼の者が申事ハ皆な偽りで御座ります。今日の茶番の作者あり。坐頭あり。親方とか太夫とか云ハれます。身分の者で御座ります。卒八「最ら。か様も成りませ。者に御座ります。へい。類が正銘阿婆太郎と申者で御座ります。卒八「最ら。か様も成りましてハ。是非に及びませんが。先刻出ました狸ハ喰れて仕舞ましたら。今の思ハ 御座ります。是非に及びませと。副に悲しう御座ります。と各々種々と囁るゆる中老員上余

り見兼子)尾上「モヲシカ局様此者共を見ますれば然のみ悪意の有る族ども見えませず。今日ハ姫君様罕れの御遊山にも御座りますれば。細目をお免し遊遊てハ奈何で御座りませう局「コレハ」尾上殿の御挨拶。然一ながら見ました所が何者を見ても山家の猿。御身代も成りさうなハ一人も見えません。以後の見せ示めの爲め。御館へ引連れまして。御表へ差出す方が宜しう御座りませう。尾上「左様でハ御座りますれど。堪忍が成る堪忍ハ誰もする。成らぬ堪忍するが堪忍と云ふ事も御座りますれば。彼者等ハ難題を申付まして。其が出来致さなければ御館へ引立ると致したら。奈何で御座りませう。局「コレハ」御中老の御發明。ナカ「此局あつて無いも同断能い思付き。シテ其難題と申すハナ」尾上「左様で御座ります。準備の御銚子も有り。御肴も有る事あれハ。此者共へ大きき器よて。吞ませ手から手よ渡し。少一も下よ置く時ハ館へ引立てませう。幸ひ酌人よハ前出たる、、、、の大ある男子是へ」とわりければ。ハット出来以前の狸大罌丸を引摺り。く。身ハ粗服を纏ひ。何と御川で御座りますか。尾上「奈何ハ

も其方此八人が酒宴の酌人。相手を申付る。汝の身体の汚穢を嫌ひ右や左く巾着あらハ耳邊召捕り館へ引かん。所の者の此共が酒宴の相濟むまで。出口々々を差固め蟻の這出る所も無さや。川心厳しく守て宜からウ。お局様イサ先づ御船へ女中「御立あられませう(入替つて)奥家老「コリヤ。中老尾上殿が格別の慈悲。只今御酒御肴も被下はどよ。難有頂戴致たせ。若一尾籠の振舞ある時ハ。誰彼の用捨ないぞ。此時土地の者の出口を守り船中よりハ大廣蓋お井の大鉢三ツ並べ三割の樽のかいみを抜き柄杓を添へて給りければ。八人の其中も左次ハ分別あり貞よ。左次「モシハ前達ア何と思ふか先刻血の雨が降て生贖を取られ加之此狸さんが出たもんだから。彌々驚りサ。夫も今見れば此人ハ御藏前へ出てゐる大罌丸よ。左様して見りやア此船の内の人達が一穴の狸で一杯喰たのだらウ歎。阿婆「カウ。罌丸さんお前ハ何いふ譯で我身等を驚かしたのだ罌丸「ハイ何か存じませんが。昨日の夕方羽織を着た粹な御方が二人お出をさいまして。手前よ用があるから。自己達と言ふ通り成れど。夜仰て。頼と二ツ紙よ包んで被下た



ゆゑ一月の嶺が一晩あるといふものゆゑ、何も存じませんで参りまゐたが。私も狸
 よ魅されハせぬかと。心配しまして。若しや懐中の金も木の葉よでも成りハせぬかと。
 先程より。捻て見ましたが。未だ儘よ金でおまゐたから。先づと存じて居ります。春七「
 皆が其様よ評議斗り仕てゐると又船の中から澁を喰て縛られても。つまらねへ。卒八「左
 様。然し自己が思ふよハ此肴が何も合點がゆかぬ。お姫様の御遊山よ此お肴ハ何事
 だ。ヤア大鉢に冷麥がある。此奴ア盡おかいたもの、様だ後で蚯蚓よ成りアしめへか。
 其方の。ひたし物ハ馬の糞を散して花片を掛た様子よみえるし。大井の中ハ飛龍頭の
 味煮こいつア。キツ公か狸印も大好物だと聞てゐる油揚よ向様も喰よくじやア。ねへ
 か。頭武「其でも吞たり喰たり仕ねへと又繩目だなんと云ハれるせ。だが不敬ながら。藏
 前の親方毒見を仕て呉れないか。野呂「自己がお酌仕やう。翠「ハイ。其よは及びませ
 ん。左様あら御先へ。ト垢だらけの手で柄杓を持つて吞む。翠「コレハ。柳上酒ハイ
 是ハ難有う御座ります。左様ならト左次郎へ献すゆる。苦い貞として。せめて。杯洗

で、も溜いで呉れ、ハ宜いよと思へども。左次「トキよ翠九さんか前の手ハ昔が生へて
 かなが何時湯へ這入をすつた。翠九「ハイ五年此方湯不這入たことハ御座いません。其よ
 翠九が痒いので掻きますから爪の間ハ皆ナ翠九の脂で御座ります。左次「エ、ゲツア何
 も堪らねへ其を聞て。未だ何分も魅されてゐる様な心持だから。吞たくねへ。頭武「吞ま
 ねへ時よヤア又繩目だ何仕たら宜からう。左次「仕方がねへ一杯やれかト。グツト吞干し
 此奴ア宜い酒だ頭武さん献う。頭武「ハイ。と一ツ受け左次さんが能い酒だと言ひます
 つた。けれとも。豈夫と思つたら。此様を宜い酒ハ自己ア生れてから今迄吞だ事ア。ねへ
 卒八「眞實よ早く献しねへ。阿婆「夫じやア。肴も宜からう其油揚を一ツ喰てみやう。旨へ
 此奴ア海老しんじよへ。卵を入れて木耳。蓮根。牛房を交ぜたのを揚たのだ。何も旨い
 頭武「其じやア其方の蚯蚓も喰へるだらう。左次「ドレ。此奴も味の何のといふ
 所じやアねへ。吉原の土手の向の裏の様な所の蕎麥やで賣る鯛蕎麥といふのを温飩で
 打つのだらう。丸で鯛を喰ふやうだ。旨へ。春七「ひたし物ハ何だらう三葉で



し菜でもあし。何だらう。山葵がさいてゐるぜ。左次「是やア何も異だぜ。事よつと此間の趣向を富山様の奥女中が聞いて自己達の美しい男態を見物がてら。スツパリ昇きよ来たのだから。翠的の酌の少し汚いが酒が宜し肴がい、と来てゐるから猪口を離すが惜い。卒八「モシ。左次さん先刻から。一件で肝が潰れて仕舞たから。此八人が洒落と云つちやア。一個も出ねへ大に酔も廻つてきた些少洒落の何だらう。出目「ヨシ。先刻出た女中衆の衣類ハ數寄屋ハ越后。自己ア肝が潰れて。さんちいみハ何だらう。吞七「長へ前書だナア。梅の脇から。すまや。さん。ち。み。の。旨。から。う。出目「お前の川柳と掛て鏝錢と解く意ハ悪錢柳だ。吞七「一文で大金を見る御藏前ハ何だ。卒八「何分も猪口の廻りが遅いのは困る。オヤ。〜蚯蚓ハ最うおつもりか。阿婆「翠公が爰をせん度と喰ふからヨ。左次「斯奴ア然し有理さ。翠公「何様いふ譯か御前様と御一所はお酒を頂戴いたすとハ真不冥加至極で御座います。卒八「冥加至極々樂の追分といふハ斯様を所だらう。照入「何故。卒八「苦しみを忘れたり嬉しさを忘れたりするからヨ。出目「左様サ自己ア先刻縛ら

れた時ナア。實不悲しかつた。阿婆「出目公ハ實に泣いたツけの。出目「自己ア泣まいと思つたが。何分も涙が合点しかつた。卒八「今こそ此様して言葉も出るが。先刻ア、皆ナ慄へあがつた。吞七「其ア左様ヨ（斯て杯を手から手へ廻しおれ。皆な大に酩酊して。大翠丸ハ申す及ばず。丑刻頃よハ一人こけ。二人こけ。八人とも正体なく。轉り〜と倒れ伏す。此時寐息を伺ひ土地の若者ハ取散したる。杯盤を取片付船の中へ持運び。何か代り取散らす。品ハ何とも白川夜船。船ハ車を曳くが如く。時分の宜しと皆々船に乘移り、洲のある方へ漕で行き夜網を曳せて。遊びおし。秋の夜のあらひよて早や東の方よ。寝驚く横雲。美人の唾不彷彿り。ホンノリ赤き其内よ鳥ニツ四ツ森を放れて。カア〜と鳴渡れども酔倒れたる八笑人ハ高鼻よて淺草寺の鐘の音も五ツを打つ頃。左次則目を覺し透り詠めて驚り仰天。左次「コレ皆を。起きねへか大變だ〜と揺り起され七人諸共大翠丸も目を覺し。此奴ア大變〜と皆々騒立ち。ゲロ〜と逆戻し。一人も吐かぬ無かりしが。大翠丸ハ吐しあがら。片手で懐中の一円銀を探りて完

雨と笑ひ翠丸「モン旦那様方。自己ハ步行か遅う御座いますれば。お先さへ参ります。誠
 一失禮を致しました。皆様の御容り此所よと言捨て。ひよろくとして立歸る。左次「ト
 キニ昨夜言かつたのも彌々狸又魅されたのだぜ。呑七「酒樽と思つたのハ。小便桶か。エ
 、汚ねへ。卒八「それ此所は喰こぼして有るのハ馬の糞だ。オ、此所よハ蚯蚓が這てゐる
 。奈何したら宜からう。腹中が引繰返るやうだ。又出るぜゲロくくく。左次「眼公自己
 の脊中を些と。さすつて呉んねへ。ア、切無へく。オイ。そして此所ハ何時までも居
 たら。又土地の者よ矢釜敷云へれるだらう。昨夜若竹の船を探した時ハ居無つたが。今
 彼所よ掛つてゐるぜ。船夫を起して歸らう。阿婆さん。呼で呉んナ。阿婆「自己ア思出すと
 込揚て何分大な聲が出ねへ。ハ公呼て呉んナ。眼七「オ、イ、若竹の船やアイ。若竹やアイ
 。と呼びけるよ漸と目を覺して。船夫「お歸んをさるのかナ。歩むを掛けておきやしたか
 ら此方へお出でなせへ。皆々貞色ハ青菜の如く心地も悪くければ中よハ步行くことと
 出来兼て四ノ這ひよ這ふもあり。邊りよ落ちたる棒なを拾つて。杖よすがりて行くも亦

り。鳴物小道具をどハ皆を船夫よ頼んで。遅んで貰ひ。少しも速く漕出して。尻を喰ハぬ
 が專一と。船夫二人よ二鉢づ、氣張り漸く半町斗りも來て良を洗ひ漱をつかひ。人心付
 さたれども。腹恰好甚だ悪しく。船中消々としてありしが。阿婆「响よ船夫昨夜自己達か。
 土地の者よ縛られた眼。船へ迎込うと思つて。もやつて。有た所へ行たけれ共。船ハ無し
 據なく残らず。總目の愧をかいたが。お前達ア何所におたのた。船夫「ハイ自己が脇よ着
 ておた。汁こぼしハ神田川の船で。船夫ハ自己等か友達で御座りやすが。此船へ來て少
 し理由が有るから些の間此船を洲へ掛ておいて呉れと頼みまして。勿論其代りよ御辭
 儀もさせるし。酒も呑せるから。此汁こぼしの行く迄で候てゐると云ひやすから。其故
 洲へ着て居やしたのサ。左次「左様か那の船ハ島山様の。お嬢様が乗てる。納船だ。云
 つたが左様の。船夫「大違ひの。コンくちさで御座りやすア。卒八「コンくちさア。
 狸じやア無くつて狐か。船夫「ニ狐だか何だか。知りやせんが暫時すると船を洲へ着て別
 よ又瀬船が來て夜網サ。眼七「夫でも與女中ハゐたらうが。船夫「夫も大違ひサ。左次「左様



ちり何者が乗ておたのだ 船夫「友公何とかいつけあア(友と云ふの今壹人の船夫の名を
 り)色の白い圓貞を人が大將よ。ソヨ〜十返舎とい、ッけ。ろれ不十手とか。實体と
 が。云ふ人もおたア 友 爲赤とか云ふ人も居たつけ。夫不町の人達が。大勢。女形の鬘を掛
 ておるも有りやしたが、衣裳を股で全裸身でおた衆も有りやした。呑七「そして 自己達
 の何か附でもしたかの 船夫「左様サ。お前様方の前へじやア言ひ借いヨ 眼七「何だか 遠
 慮ハ無沙汰だ。有体よ云ひねへ 出目「どんだ所へ無沙汰が出たの 船夫「圓貞の人が云ふ
 不やア。世の中は頼痴氣も澤山有るもんだ。墨丸男の正体が知れた日よやア。譬へ奥女
 中の出立で出たつて。性が男だから氣が付ささうあ。もんだと言ひやした 船友「爲赤さ
 んとやらも岩藤の臺詞回しよ御先祖空阿彌様の御墓の前とハ餘り。人も無げの言様だ
 つけ。鏡山と寺子家と梅の山兵衛も難つておる。出鱈目の長文句もある。四藏だつけ。向が
 餘程頼痴氣でおればこそ。旨くいつたもの、危い藝道だつけ。と云ひやうた 呑七「夫じ
 やア土地の若い衆と思つた奴等も 船夫「山谷吉原の人達サ。野呂「彼奴等も何ぞと云つ

たかの 船友「十手とか笠亭とか云ふ人が一体灘亭の八笑人の實は滑稽澤山だが。一筆菴
 がそれを真似て能く書きやしたが惜いかな遠行せられて板元が上の巻斗り彫かけて。
 仕方がねへから。奥山の黒い男よ書足を頼んださうサ。置より作者が頼痴氣だから。前
 後不揃ひの仕方がねへ 左次「左様かの。何も意趣も遺恨も無へ者達を何故。斯を目よ合
 せたらう。是から直は追撃して。汁こぼしへ乗込うか 卒八「夫も宜いが 向も多人數乗て
 ゐるから。喧嘩よでも成ちやア。可嗤くねへから。今日ハ一先づ歸りやせう 呑七「其を聞
 いちやア。何もグロ〜。吐すことハ無つた。思へば悔しい。食ひ物の遺趣ハ。何時迄も
 忘るこつちやアねへ。尋えてけつけれ。戯作者共め。眼七「おんまり力身をさんナ。今流
 行の作者達が揃て書た狂言だもの。ナカ〜素人の此方等が及ばねへ事だ 左次「然し。
 思〜しいなア。何分腹の中が異しい。何かよ中つた様な心地で一首。うかんだ

戯作者の穴ハ一つの古狸

書ひろげたる翠丸の春

斯く打興じつ、船の浅みとりある柳橋香やのかくる、と詠みたる梅川の河岸よそ若

花曆八笑人五編下之巻終

◎此書原本ハ

初編上下二冊 第二編上下三冊 第三編上下二冊

三編追加上下二冊 第四編上下二冊 四編追加上下二冊

第五編上中下三冊 惣計十五冊ありけるを看客の見易かちんが爲今是を合綴して

七冊とす

原作者兼身鯉丈氏ハ初代爲永春水子の家兄あり此書初編ハ文政三庚辰の春發兌出天保五年四編追加の巻迄よして中絶せしを遺憾の餘り嘉永二巳酉歲一筆葦英泉翁局を結ばんとを思ひ立れし事ならずして遠行されよき依て與廣亭のすじが筆を隔て終ふ五編の肩を結べり是を世に名高き八笑人てふ書の本化本基なり原書ハ今猶文永堂よ存せり其くハ兩書合して照覽あらんとを

柳園美登里述

書かきひろげたる翠丸きんたまの春はる

斯かく打興うちきようじつ、船ふねの淺あさみどりある柳橋香やなぎはしかやのかくる、と詠よみたる梅川うめがはの河岸かたしよぞ着つ

花暦八笑人五編下之巻終

○此書原本ハ

初編上下二冊 第二編上下二冊 第三編上下二冊

三編追加上下二冊 第四編上下二冊 四編追加上下二冊

第五編上中下三冊 惣計十五冊ありけるを看客の見易からんが爲今是を合綴して七冊とす

該作者澁亭鯉丈氏ハ初代爲永春水子の家兄あり此書初編ハ文政三庚辰の春發兌ハ天保五年四編追加の巻迄よして中絶せしを遺憾の餘り嘉永二巳酉歳一筆葦英泉翁局を結ばんとを思ひ立れし事ならずして遠行されよき依て與風亭のうしが筆を嗣て終ハ五編の局を結べり是あん世ハ名高き八笑人てふ書の本化本基なり原書ハ今猶文永堂よ存ぜり冀くハ兩書合して照覽あらんとを

柳園美登里述

明治十三年十二月三日刻御盾

定價一圓五拾錢

著者

龍亭鯉丈著

著人

武部龍三郎

東京區神田區香地

東京橋町四丁目

鶴屋書

日本橋區通四丁目

春陽堂

同本石町二丁目

辻岡文助

同藥研堀町二丁目

上田屋榮三郎

同橫山町二丁目

鈴木喜右衛門

同通木挽町

內藤加代

同橋區木挽町

鎮田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田

同橋區木挽町

町田



